

ばとるあすほーる
お亀納豆

「女子にうまい棒を食べることを強要するのはセクハラだろうか」

「じゃあ、手始めに部長のケツにうまい棒を突っ込んでみましようか」

「最近、君のツツコミはパワープレイが過ぎると思うんだが」

部長がやれやれと溜息をつきながら、そんなことを言う。

「部室に来る度に、脳に虫の湧いた発言を聞かされる俺の身にもなつてください」

部長は俺の言い分なぞ、全く気にしていない様子で続けた。

「大体、君の暴力を伴うツツコミは何故僕の尻周りに集中するのかね。そんなに僕の肛門の数を増やしたいのかい」

「良いじゃないですか、別に。ケツの穴が二つになれば、ウンコをする速さが二倍になりますよ」

部長が眼鏡を光らせ反論する。

「馬鹿者、その分、尻を拭く手間も二倍になるだろう」

「いえいえ、元のケツの穴をA、二つ目の方をBとすると、Aを拭いた流れでそのままBを拭けば良いんですよ」

「冷静に考えたまえ。その場合、Aで拭きとった汚れをBに擦りつける結果とはならないかね。それでは本末転倒だ」

部長の声色に普段のようなふざけた気配は一切感じられない。それだけ、二つのケツの穴という未知の存在への好奇心が強いということだ。阿呆か。

俺は健全な高校生らしく、部活動をしたいんだが。

「それに、AとBがどれくらい離れているのかということも問題になってくるな。もし、ある程度の距離があるとするならば、一度の尻拭きで両方をカバーしようとした場合、二つの肛門の中間部分を不必要に汚す危険性がある」

部長があまりにも真剣に議論するので、俺も段々ケツの穴が多い方が良いのかどうか、気になってきた。

部長が苦々しい表情で、

「くそ、駄目だな。ここでいくら考えていても実物が無いことにはどうしようもないな。ああ、僕の肛門が

二つあれば良かったのに」

と呟いた。その一言が全ての始まりとも知らずに。

翌日。俺が部室で茶々太郎ちやちやたろうの淹れてくれたお茶を穏やかに啜っていると、部長が部室に飛び込んできた。

「大変だぞ!!」

そんなに大声で叫ばなくても十分聞こえるというのに。

「一応訊きますが何ですか？」

「尻の穴が二つになったツ!!」

「最早病院では手遅れか……」

俺がぐんによりしたのを見て、部長は更にヒートアップした。

「その顔は信じていないな。よし、特別に見せてやろう」

部長はキリツと実は割と整っている、眼鏡の乗った顔を引き締めると、ベルトをガチャガチャガチャとやり出した。

戦慄。

その後、汚物などという表現ではとても説明しきれない猥褻物を見せられた俺の心境は筆舌に尽くし難いので割愛させていただく。賢明な読者諸氏ならば、そんなものの詳細を読んだところであなた達の人生に何一つ益が無いことは理解^{わか}つていただけるだろう。

結論から言うと、部長のケツの穴は本当に二つになつていた。オリジナルのものから三センチほど背中側に、もう一つ穴があつたのだ。どうしてこうなつた。

「最初に気付いたのは今朝、大便をしたときだ。排泄したときの、あの解放感が二重に得られてな。もしやと思い、触つてみたら、何と！ 肛門がもう一つあるではないか！ 興奮のあまり、手に付いた糞にしばらく気付かなかつたほどだ」

部長はキラツキラした瞳で俺に語り続ける。何で高校生にもなつて、こんなに嬉しそうに尻の穴の話をしなきゃいかんのだ。

「ちゃんと手は洗つたんでしょうね」

「ん？ ああ、忘れていた。……冗談だ冗談！ 椅

子の足は尻に入るようには作られていない！」

ただでさえ下の話なのに、更に話を下品にしようとする部長に、俺のささやかな注意が伝わったようだ。

「何なんですか、アンタ。触手のときといい、ハ○ヒの劣化コピーか何かですか！」

「それがそう上手いこともいかないんだな。美少女ハーレムとかも願ってみたが、一向に実現する気配が無い」

残念過ぎる。

「しかし肛門が二つになったら、一つと二つ、どちらが便利かがはつきりするかと思っただが、自分のが二つになっても自分で確認出来ないから検証が難しいな」

しかめつつらでそんなことを言う部長。

「さつきまで自宅で鏡を二枚使って見ようとしたりしてみたんだが、場所が場所なだけに、なかなか難しくてな。ついつい学校に来るのを忘れてしまっていたよ」

だから、俺の方が部室に来るのが早かったのか。

「何か良い方法はないものか」

腕を組んで、思案し出す部長。と思っただら、急に

ぱつと顔を輝かせて、

「ちよつと待て。もしやこれは学園異能バトルの始まりではないかね」

よし、無視しよう。

「ほら、最初はコメディテイストなのに、いつの間にかバトルメインになっている漫画がよくあるだろう。これから様々な能力者が僕達の前に現れるに違いない」

無視しているのに話を進められたら、もうどうしようもない。

「僕の力はさしずめ デュアル・ホール へ双穴」といつたところか」

「尻の穴でどうやって戦うんですか」

いかん、ツツコんでしまった。

「放屁で超加速とか出来るかもしれん」

ひたすらに阿呆な話を続けていると、がらりと部屋の戸が開かれた。

突然のことに反応出来ずに居る俺達を意に介せず、室内に入ってきたのは生徒会長だった。ネクタイをきつちりと結び、ブレザーのボタンを全て留めている。いかにも優等生といった出で立ちだ。

普通、高校の生徒会長と言えば、学内での認知率など僅かなものだろうが、この会長は甘いマスクのお陰で女生徒にやたらと人気がある。その分、男子には不人気だが、知名度がそこそこののは間違いない。

彼は俺達二人の間で視線を彷徨わせ、一言「うん」と呟くと、

「君かい。成り立ては」

とだけ、部長を見て、言った。

対する部長は、ぽかんとしていたのも一瞬のことで、にやりと不敵な笑みを浮かべると、

「やはり現れたか」

と立ち上がった。

会長はにこやかな顔を崩すことなく続けた。

「新たな能力者が生まれた気配を感じてね。一体どんな能力かな」

「肛門が二つある」

部長はキリツと答えた。俺にケツを見せた後、ベルトを直すのを忘れていたようで、ズボンがずり下がってきている。

「それは興味深い」

会長は一步、前へ出る。

「僕の能力は〈魔の三角地帯〉と言つてね」

話しながらブレザーを脱ぎ、ネクタイを緩める。

一体、どんな能力なんだ。筋肉が盛り上がつて、逆三角体型にでもなるのか。

カッターシャツのボタンを外した会長はなおも自然体だ。

その胸には、当然乳首がある。
だが。

その数がおかしい。本来、人体が持つ乳首の数は二つの筈だ。それは男女の違い無く決まっている。そんな自然の摂理に逆らうかのように、会長には乳首が三つあった。通常的位置にある二つの乳首の中間点、それよりやや上方に三つめの突起物が厳然と存在していた。

「乳首が三つあるんだ」

その声音は女生徒達を恋に落としそうな爽やかささえ含んでいた。おかしい、何故乳首の話をしているだけなのに、こんなに爽やかなんだ。

「さあ、新入り君。君の力を試させてもらおうか」

会長の右乳首が一瞬光ったかと思うと、部室の奥の方で、しゅごっ！ という短音が弾けた。音のした方向を振り返ると、パイプ椅子の座面から煙が立っていた。

何だ、会長が何かやったのか。

「く」

部長は苦虫を噛み潰したような表情で立ち尽くしている。この状況を喜んでいるかと思っただが。

「部長君は気付いたようだね。そうさ、ちくビームだよ」

余裕の笑みを浮かべる会長。ちくビームとか久しぶりに聞いたな。俺の知っているちくビームは物理的な破壊力は持っていないが。

「全く見えなかった……」

部長は茫然と呟く。

「僕が本気を出したら、君は今までに三二六回は死んでいるね」

来期の試験問題の予想でも話すかのように、さらりと告げる会長。

部長の身体にいくら風穴が空こうとも一向に構わな

いが、部室自体や備品を破壊されるのは非常に困る。乳首をさらした男とズボンを半脱ぎの男。どちらもただの変態にしか見えない、その出で立ち。だが、両者の間には圧倒的な差があった。

部長が膝から崩れ落ちる。

「〈魔の三角地帯〉、何て威圧感だ……」

乳首に威圧されてたのかよ。こうして見ると二人ともどっこいどっこいの変態だぞ。

会長は放り捨てたブレザーを拾って、

「今、君をどうしようというつもりはないよ。でも、戦いから逃げることは出来ない。そう遅くない未来に、決断することになる」

何をだよ。

「身体のパーツが増えるタイプの能力者は珍しい。精進したまえ」

思わせ振りのことを言っつて、去っつていった。

「何なんだ……」

俺が状況についていけないでいると、よろめきながら何とか立ち上がった部長が言った。

「生徒会長、恐ろしい男だ……。だが、いつか必ず勝

っ！」

スポーツマンシップに溢れた決意表明だった。スポーツマンじゃないけどな。

「もう勝手にしてください」

俺が呆れかえっていると、部長がぱあつと顔を輝かせて叫んだ。

「そうだ、そうじゃないか！」

最早、部長の発言には返事をしてやらないといけな
いという義務感だけで訊ねてみる。「今度は何です」

「僕が間違っていたよ」

「珍しいですね、部長が自分の間違いを認めるなんて」

部長は最高に爽やかな笑みで、

「ナニを突っ込める穴は多い方が良い!!」

拳を握り締めて力説。

「死んでしまえ!!」

部室の床に少し血の染みがついたが、俺は後悔していない。

部長がノリノリな以上、きつとこれからも阿呆な戦いに巻き込まれてしまうだろう。だから、今は戦いが

さっさと終結することを祈って、この言葉で締めよう
と思う。

俺達の戦いはまだまだ始まったばかりだ！

了

ぼとるあすほーる

2010年 3月30日 公開

著者 [お亀納豆](#)

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 [ver.T](#)

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。